
Remember the time

ようまま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Remember the time

【コード】

N95620

【作者名】

よつまま

【あらすじ】

人を愛するという、神聖な行いについて。

前編

磨き上げられた大きな窓から、都会のきらびやかな喧噪が見える。地上の明かりが濃紺の夜空を浸食しようとしている。

小さな、本当に小さな星の光が、その手から逃げようと、か弱い明滅を繰り返した。

私はシャワーを浴びたての火照った身体の上から、日本の着物と言われるガウンを羽織ると、胸の下あたりでゆったりと紐を結んだ。部屋のコーナーにあるスタンドの明かりをともすと、外からの青白い光に満たされていたリビングは、やっと暖かさを取り戻す。

私は再び窓をみやる。

そこには細い身体に異国のガウンを羽織った自分が、ものうげな表情で立っていた。

仮住まいのアパートメント。

すべてが仮しつらえで、すべてが中途半端。

とにかく広いリビングは、自宅にはないようなモダンな家具がおかれている。キッチンにはお気に入りのカップも、調理器具も何一つない。

部屋は汚れることもないけれど、毎日ピカピカに磨かれて、立ち入ることも躊躇するほどだ。

ここは自分の住まいではない。

どうしようもなく、落ち着かない毎日だった。

それもそのはず。

遠くこの地に滞在し、これから過酷な撮影が待っているのだ。

私に演じきれるだろうか。

人々からの期待の視線に笑顔を返しながらも、本当は泣き出したいほど不安でならなかった。

唯一の救いは、彼が、あのちいちゃかった彼が、私と一緒に出演す

ること。

彼が見事役を射止めたとき、彼に賛辞を送るとともに、神に感謝したのだ。

ありがとうございます。

私は一人きりじゃないんだわ。

そこにドアベルの鳴る音。

私は自然と笑みがこぼれた。

髪を右手で整えると、ドアの方へと赴き、ブルーの扉を静かに開いた。

そこには彼。

グレーのチエックのシャツをデニムに押し入れて、その上からコートを羽織っている。

若々しく、そしてエネルギーに溢れたその顔が、ぱつと光り輝いた。

「遅くなっちゃった。」はにかむように言うと、彼は部屋へと入って来た。

コートを脱ぎ、ソファアの背もたれにかける。

「何か飲む？」私が訊ねると、彼は「じゃあ紅茶を。」と答えた。

私はどこに何があるのかわからないキッチンで、どうにか暖かな紅茶を入れると、リビングのテーブルへと持っていく。

彼はソファに座り、手に持っていた台本を読み始めている。

「暗いわね。」私はそう言うと、テーブルの手元を照らすスタンドのスイッチを入れた。

私は彼の真向かいに座り、熱心に台本を読む彼をしばらく静かにみつめる。

くつろぐには少々スタイリッシュすぎるそのソファに座る彼は、私の知っている少年ではもはやなくなっていた。

自身の信念に基づき、努力し、成功を手にいれようとしている。いつのまにかぐんと伸びた身長と、長い手足。

シャツの襟口からのぞく鎖骨から、繊細ではあるけれどがっしりとした首が伸びる。

褐色の肌は、内から溢れ出るエネルギーで、つややかに光っている。

彼は視線に気づいたのか、顔を上げて私をみた。

そして恥ずかしそうに、再び笑う。

その笑顔は、でも、昔と変わらなかった。

彼は落ち着かない様子だ。

「ねえ、ここ、あなたの考えを聞かせてくれない？」彼はごまかすように、私に台本を指し示す。

私は彼の側により、カーペットの上に座り込んだ。

ソファに座る彼を見上げると、彼はまた恥ずかしそうに視線をそらす。

私は彼の手元を覗き込む。

自然と彼の膝に手をおいた。

すると彼がびくつと緊張したのがわかった。

「どうしたの？」私は優しく問いかけた。

「・・・ううん、いや、なんでもないよ。」彼の視線は台本と私の手と、そして胸元を彷徨っているように感じられた。

「明日も早いのに、どうして来てくれたの？」私は言った。

「だって、あなたが来てほしいって言うから。それに撮影に入る前に、もう一度あなたとこの映画について話してみたいって、そうも思ったし。」彼は私の顔を見ない。

「ねえ、こちらを見て、話をしてよ。」私は彼の頬を触り、そつとこちらを向かせる。

こちらを見下ろす彼の顔は、困惑し、動揺し、そしてそれを恥じて

いるかのようだった。

「あなたはどうしてぼくを呼んだの？」

「どうしてかしら・・・」私は彼の頬にあてていた指をそつと唇の方へとずらす。

彼がはつと、身体を離す。

「どうしてかしら・・・」私は中に浮いたままの私の指先を見つめた。

「ぼく、帰ります。」彼は視線をそらし、立ち上がった。

「行ってしまうの？」私は例えようもない寂しさを感じて、思わず問いかけた。

スタンドの明かりは、戸惑う彼の背中を照らす。

「ねえ、どうして行ってしまうの？」私は再び問う。

「・・・あなたは、とても残酷だ。」彼は振り向き、とてもつらそうな顔を見せた。

スタンドの明かりが、彼の陰を壁にうつす。

ゆらゆらと、二人の間の空気をも、壁に投影しているかのようだ。

「あなたは残酷だ。ぼくの・・・ぼくの気持ちを知っているのに。」
彼が悔しそうに言った。

責めるような目で見つめる。

「あなたはぼくの気持ちに伝えるつもりなんかないのに、こうやってぼくを引き止める。」彼が再びうつむくと、私はしばらくその姿を見つめた。

何度も彼は私に愛を告白した。

少年に特有な、一途で、夢中で、ひたむきな、熱い思い。

彼の私に対する気持ちは、いつしか消え行くものだと思った。

いつまでも少年ではいられない。

大人になれば、私の存在が情熱の対象ではないということぐらい、わかるはずだった。

でも、彼は今、少年から青年へと成長しようとしている、その瞬間にさえも、私を必要だと言っているのだ。

私の身体全体が、理性とは別のものに突き動かされる。愛なのか、情動なのか。

よくわからない。
けれど。

彼をこのまま帰したくはなかった。

私はテーブルのスタンドの明かりを消す。

彼がはっと、顔をあげる。

私はコーナースタンドの明かりも消した。

リビングは再び、窓からの青白い光に満たされる。

車のクラクションの音が、遠くで鳴っている。

私は彼の手をとって、キッチン脇の真っ白なスライドドアを開き、彼をベッドルームへと誘った。

彼の緊張がピークに達しているのがわかる。

ベッドルームもリビング同様、大都会の青白い光の終着点となっていた。

月光とは異なる。

でも神聖な光。

彼は扉のところで立ち尽くしている。

私は窓を背に、彼の方を向いた。

彼が私の姿をじっと見つめている。

身動き一つしない。

私は紐をほどくと、肩から着物を外し、床に落とす。

私は下着をつけていなかった。

彼が息をのむ音が聞こえた。

そしてあわてて目をそらす。

「ガウンを着て。だめだ、そんなこと。」彼は手で自分の顔を覆い、首を振った。

「こちらを見て。」私は言った。

「だめだよ。お願いだから。」

「見て欲しいの。私を全部。」私は彼に静かに歩みよる。

その気配を感じてか、彼が後ずさりした。

私は彼の手を取り、こちらを向かせる。

「目を開いて。さあ。」私がささやくと、彼は恐る恐る目を開き、私の顔を見る。

そして「ああ」と小さくため息をついた。

私はそんな彼の姿を見ると、身体中に血が巡るのを感じた。

「いいのよ、手を触れても。」私は彼の手をとると、自分の胸にそつともつてゆく。

すると彼は手を振りほどいた。

「大丈夫。怖がらないで。」私は彼の両頬を手ではさみ、キスをした。

ゆつくりと、時間をかけ、彼の唇を開かせる。

すると彼は徐々に自制心を失っていく。

乱暴に私を抱きしめると、唇をむさぼりながら、ベッドへと倒れ込んだ。

けれど私を見下ろすと、とたんに我に返る。

「だめだ。いけないよ。手が・・・手が震えて・・・。」彼が私から身体を離し、枕に背を預けて、こちらを見上げる。
確かに手が震えている。

「怖いのか？」私はその震える手をそつと握り、優しく問いかけた。

「ああ、だって。こんなの、できないよ。無理だよ、ぼくには。」

彼は今にも泣き出しそうだ。

「ぼくにはできない。あなたに、そんなことできないよ。ひどいと。」彼は再び手で顔を覆う。

「ひどいことなの？」

「そうだよ。ひどいことだ。恐ろしいことだよ。男女が何をするかは知っている。でもそんな必要はないだろう？そんなことしなくても、魂と魂は結びつけられるはずだよ。」

私はしばらく彼の手をなでる。

「怖がることではないわ。愛し合う男女なら、必ずすることよ。」

「でも女性は悲鳴をあげる。」彼は私にすぎるような眼差しを向ける。

「大丈夫よ。そんなことないわ。」

「・・・ぼく、したことがないんだ。」彼が私から視線をそらす。

「わかってる。大丈夫よ。共にゆきましょう。」私は彼のおでこにキスをする。

「だからもっと、私にあなたを見せて。」私は彼のシャツのボタンに手をかけた。

後編

私は彼の膝にまたがると、右手でシャツのボタンを外しだした。ひとつ、ふたつ、みつつ。

外すごとに、彼の鍛えられた肉体が露になる。

私はシャツをはだけて、その中に手を差し入れた。暖かく、そして緊張している。

彼は首を横に向け、目をぎゅっとつむっている。

そして私が彼の肌をなぞるたび、彼は深く息を吸い込んだ。

「目を開いて。」私は彼の耳元にささやく。

「・・・無理だよ。」彼は更に目をきつく閉じる。

私は彼の唇に軽くキスをする。

驚いたように彼が目を開く。

私は彼に微笑みかけ、再び唇を重ねる。

何度も、何度も、彼の唇にキスをして、そしてとうとう彼にこちらを向かせた。

「今度はもつと、長く、あなたを感じるわ。」私はそう言うと、彼に深くキスをする。

彼から吐息のような声が出て、彼は私の唇に応えだした。

薄暗い部屋のなかに、二人の息づかいと、たまらず漏れ出る声が響く。

どこかでパトカーのサイレンがなっている。

私たちは夢中で互いの唇を感じ合った。

私は手を彼のジーンズのファスナーへのぼした。

触れると、彼が「あ」と声を出し、その手を止めようとした。

「見せて。」私は彼の顔を見つめ言う。

「・・・ああ、やめてよ。」彼は顔を真っ赤にして、首を振った。

「怖がらないで。大丈夫よ。」
「だめ、嫌だ。」彼は私の手を離さない。
私は彼のファスナーに顔を寄せ、布越しにキスをした。
「ああ・・・」彼は声をもらして、力を緩める。
私は彼のファスナーを静かにおろした。

「私を感じてくれてるのね。」私は彼に手を触れながら、いとおいそうにつぶやいた。

「やめてよ。」彼は今にも泣きそうな声を出す。

「うれしいのよ。」私は彼自身をすっかり出すと、直に手を触れる。

「ああ、触らないで。」彼が身をよじって逃げようとする。

「どうして？私の手のひらを感じてみて。ほら。」私は彼自身を手の平に包んだ。

すると「ああ、だめだよ！」と彼が大きな声をだし、私の手を押さえる。

そして堪えきれず、身を震わせて、全てを出してしまった。

私の手と、彼のジーンズが濡れる。

「ああ・・・」彼が顔を覆う。

「もう、限界だ。ごめんなさい、本当に。あなたを汚してしまった。

「彼は本当に泣き出した。

「恥ずかしくて、惨めで、耐えられない。」彼は静かに泣いて繰り返す。

私はそんな彼の涙に濡れた頬に唇を寄せると「うれしいわ。」と言った。

「私を感じてくれたんでしょ？それはとっても幸せなことなのよ。」

私は濡れてしまった彼自身にそっと口づける。

「あつ。」彼はびくつと身体を反らした。そして「だめ、そんなこと。汚いよ。」と泣きながら訴えた。

「愛しい人のだったら、そんなこと関係なくなるのよ。」私は彼自身を自分の唇で味わった。

その間、彼は身を震わせて、必死に声を堪えてる様子だ。彼の指が、真つ白なシーツを握りしめている。

私はそんな彼をたまらなく愛しいと感じた。

彼の全てを私の唇ですっかり濡らしてしまつと、私は顔をあげ、再び彼の顔を見る。

彼は顔を真つ赤にして、恥ずかしさで顔を紅潮させていた。

私は彼の手を取り、その指を唇へと持つていく。

長くまつすくな指。

私はその指先にキスをする。

そして彼の顔を見つめた。

「ねえ、人の身体の中で、一番官能的なのはどこだと思う？」

「・・・」彼は目を見開き、私をじつと見つめる。

「口。この唇。歯。舌。すべてがお互いを感じ取るの。」

私は彼の指を口にいれ、甘く噛み、味わう。

彼が眉間に皺を寄せ、うめいた。

「人がキスをするのは、唇で感じたいから。一番官能的で敏感な箇所を、自分の唇で感じたいからよ。」私は彼の指を口から出し、「

あなたの口で感じてちょうだい。私を。私自身を。」と言った。

彼はゆつくりと顔を近づけ、唇をあわせる。

私はその唇を噛み、舌で濡らし、彼の奥深くまで入っていった。

彼もその唇の感触に夢中になっている。

情熱的なキスを受けながら、私は身をのけぞらせる。

彼の唇が頬や目元にとどまらず、首筋や鎖骨にまで伸びてくると、

私は悦びの溜息をついた。

私は彼の頭を抱え、胸元へと導く。

彼は少し抵抗したが、すぐにその柔らかかな感触に身を委ね始めた。彼の息が胸にかかる、私は欲望に飲み込まれる。

「あなたの唇で濡らして。」私は彼に懇願する。

「全部にキスをして、全部を口に含んで、そして歯を立てて。」彼は言われるがままに、唇をはわせた。

彼の舌のあたたかな感触を一番敏感な場所に感じると、私は思わず大きな声を出した。

するとびくつと彼が身をひく。

そして私の顔を見つめた。

心細げで、叱られた学生のような表情。

「ああ、ごめんなさい。大丈夫よ。違うの。これは歓びの声。あなたを感じてるのよ。すごく。」

彼はほっとしたような顔をして、再び愛撫を再開する。

「あなたのその手もつかつて。あなたの思うままに、私をしていいのよ。」

彼は戸惑いながらも、その手を私の胸におく。

最初は恐る恐る。けれどそのうち大胆に手のひらで感じ始めた。

彼の息づかいが早くなる。

私も喘ぎを押さえられなくなっていた。

彼の手のひらは熱く、そして大きい。

私は彼に触られると、その力強さに翻弄される。

一瞬、もてあそばれているような、蹂躪されているような気持ちになった。

私は愛撫を受けながらも、夢中で彼のシャツを全て脱がせる。

青白く光るその肌は、若さに溢れ、初めての体験に上気していた。

息づかいも荒く、私たちは互いの身体に唇を触れる。

「ねえ、全部よ。頭のとっぺんから、つま先まで。全部。私を好きにして。」

私はベッドに仰向けになり、両手を頭上で組み、身体のすべてをさ

らけ出す。

彼はまた溜息をつくくと、文字通り私の身体中を味わい尽くそうとする。

彼の唇が私の腹部に達すると、私は大胆にも足を開き、彼の背中に足をのせた。

彼はその行為にびっくりした様子を見せたが、すぐに私の一番敏感な場所に唇をよせた。

彼のあたたかな感触が、私の内部にまで入り込む。

私は枕の端を握りしめ、身をよじって喘いだ。

「ああ、すごい。」彼は興奮してつぶやく。

「こんな風になるんだ。すごい・・・ああ、きれいだ。」彼は女性の神秘に感じ入ったように言った。

私は仰向けからうつぶせに変わる。

彼の唇と指が、私の背骨をまっすぐにおりてゆく。

私は喘ぎながら、身をそらせる。

彼は私の背中にぴったりと身体を密着させ、私の耳や首筋を愛撫した。

彼自身を私の敏感な部分の入り口に感じて、彼をたまらなく欲しくなった。

「指を入れて。」私は四つん這いになって、彼に求める。

彼は恐る恐るその場所に触れる。

私はびくつと身体を震わせる。

「いいのよ、深くまで入れて。」私は息も荒く訴えた。

彼の指が、私の中に入れられる。

深く、深く、奥を探るように。

私は大きな声を出した。

彼は再び「すごい」とつぶやく。

「どうなってる？」私は彼に尋ねた。

「ああ、溢れてる。すごいよ。」彼は中を探りながら答えた。私の太ももを、暖かいものが流れる。

「それは、あなたが欲しいって印。」私は身体の向きをかえ、彼の上に再びまたがる。

私は彼のジーンズをすべて脱がし、完璧なその肉体を見つめた。彼の腹部を指でなでる。

彼が顔をしかめ、身をよじった。

先ほど一度終わってしまったとは思えないほど、彼自身は私を欲していた。

「そんなに見ないで。恥ずかしい。」彼はそう言ったが、もはや私から逃げようとはしていない。

私は彼を自身に迎え入れる。

「うわ……。」彼は身体をこわばらせ、私の腰を押さえて止めようとする。

「あ……ああ……だめだよ。あなたが壊れちゃいそうだ。」

私も侵入されるその痛みともとれる快感に、彼の腕に爪を立てて声をあげた。

私は彼をすべて収めるまで、身をよじらせて喘ぐ。

「感じて……私を感じて。」彼から発せられるエネルギーが、私を稲妻のように感電させていく。

貫かれ、

衝撃を受け、

倒れ込む。

「ああ、、、、すごい。」彼が身を震わせて言う。

「何を感じてる？」私は彼の胸に倒れ込み、耳元で訊ねた。

「……柔らかい……あたたかくて。包み込まれてる。」彼が言った。

私はその言葉を聞き、幸せな気持ちになる。

私はゆっくりと彼の上で動き出した。

彼は目を閉じて、私の腰に手を添えている。

彼の腰も自然と動きだし、私たちは同じリズムをとりはじめる。冷えだした室内のなかで、私たちだけが熱を放っている。

彼はうめき、身悶え、下唇を噛み締める。

私はそんな彼を見ると、更に欲望の火が燃えてくる。動きを早め、彼を締め付ける。

「っ……」彼が目を開き「もうだめだ。」と訴える。

そして素早く身体を起こし、私の上へのしかかった。

私の両足を彼の両肩にのせる。

更に深く、私の中へ入ってくる。

私は悲鳴をあげた。

彼は身勝手なリズムで、私を攻め立てようとし始めた。

激しく、

狂ったように、

自身の熱を吐き出すかのように。

「だめよ、ああ、やめて！」私は悲鳴をあげて、彼の胸を叩く。すると彼は我に返ったように、ぴたっと止まった。

私は肩で息をしながら「やめて」と言い、彼の頬に手を添える。

「あなたは……」私は彼の顔を見つめる。

「あなたは激しい情熱をもった人。穏やかな外見の裏には、人を焼き尽くすような情熱を持つてる……でも、それを相手にぶつけちゃだめ。あなたは相手を巻き込んで、そして破壊してしまうわ。」

彼は熱心に私の言葉に聞き入ってる。

「愛するの……女性を抱くってことは、愛してあげること。相手をすべて受け入れ、歡びに満たしてあげることなのよ。自分の欲望のためだけにある訳じゃないわ。女性が歡びに浸れば、自然とあな

たも満たされる。それは、なりふり構わずぶつける欲望で得るものとは、全く違うわ。」

彼は静かに頷くと、つながったまま、再び私を愛撫し始めた。すべてをやり直すように、丁寧に、心を込めて。私はあつという間に、彼のリズムに満たされる。

彼が幼いころ、

ステージだけではない。

自宅のリビングで。

移動の車の中で。

二人で歌った、あのリズム。

彼を見上げると、その褐色の肌を汗で光らせて、懸命に動いている。

目を閉じ、眉間には皺を寄せている。

けれどもうつすらと笑みを浮かべて。

彼は今、幸せに満ちているのだ。

私を感じている。

私を愛している。

驚いたことに、私は最後の極みにまで到達しようとしていた。

私が初めての女性とは思えない。

彼は感覚的なことに関すれば、飛び出て優れているのだ。

「ああ・・・ああ、素敵よ。」私が言うと、彼がうれしそうな顔をする。

「もっと、ああ・・・いい・・・」私はのけぞり、彼に両足を巻き付ける。

彼も顔をしかめ、うめいた。

「動きたいよ。もっと早く。」彼は荒い息で伝える。

私はうなずき、大きな声で喘いだ。

彼は激しく動き出し、大きな波が私を飲み込む。

「い・・・いく・・・ああ！」私は彼の腕にしがみつき叫んだ。

「ぼくも・・・ああ！」彼も大きくうち震え、

そして崩れ落ちた。

「やっとぼくのものになった。」彼はそういって、私の身体を抱きしめる。

汗に濡れたシーツにくるまって、彼は心地よいまどろみに誘われているようだ。

私は彼のその髪を優しくなで、彼が寝付くまで静かに見守る。

「愛してるんだ。」彼はそういって、寝息を立て始めた。

「私もよ。」私もそういって、彼のまっげに口づけた。

けれど。

あなたの愛と、私の愛はおそらく違う。

あなたの愛の激しさに負けて、私はそのうち身を引くかもしれない。

それでもいい。

それも運命でしょう。

ただ、

愛してる。

あなたのことを。

それは本当よ。

あなたが特別な人だということは、
永遠の真実。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9562o/>

Remember the time

2010年11月17日03時23分発行